

お米に感謝していただきます

雲仙市立国見中学校 一年 櫻田 結女

「ごちそうさまでした」

今日のお米もおいしかったなと思いはじめたのは、小学校五年生ごろのころだった。それまでは、

「またお米なの？」

と言いつつ、食べないでいいのなら食べようとしなかつた。お米は噛めば噛むほど甘みが出てくる。だが私は、味がしないようにしか感じ

られなかつた。

小学校五年生のときのことだ。農家さん指導のもと稲作体験学習があつた。田植えの話を聞いているときは、暑いな、泥で足が汚れてしまふ、そんなことしか考えられなかつた。いざしてみると、暑かつたし足も汚れた。こんな大変なことを毎年している農家さんは本当にすごいと思う。

収穫の時期になつた。ちゃんと育てているかなと心配もあつたが、新米を食べられるワ

クワクワが大きかった。田んぼに着くと美しい  
黄金色のじゅうたんが広がっていた。私たちが  
が一生懸命植えた稲がきれいに育っていること  
でも嬉しかった。かまで稲を狩るのは怖かっ  
た。でも、狩っていくうちに慣れ楽しく収穫  
できた。

後日、精米されたお米とおもちが配られた。  
いつもなら全然進まないお米がパクパク食べ  
れたのだ。毎日食べているご飯の何倍もおい  
しく感じた。稲作体験学習をきっかけにお米

が大好きになった。

お米をもっと好きになったのは、父が稲の  
管理を行っているのを見たときだ。水の管理  
や草を抜いたりしていた。それを見て稲作体  
験学習のことを思い出した。田植えから収穫  
の間にも農家さんたちはこんなに大変なこ  
をしてくれていたのだなと感激した。

私は、お米を通じていろいろなことを学ん  
だ。こうして毎日おいしいお米を食べること  
ができているのは、農家さんが苦勞して作っ

てくれていているからだ。そして、おいしく炊き  
食卓に上げてくれる両親のおかげでもある。  
そんなことを考えると一粒も残すことはでき  
ない。お茶わんによそわれた一粒一粒にたく  
さんの想いが込められている。その想いに感  
謝し、お米に感謝し、

う  
いただきます。